

桑原武夫集

1

1930
|
1945

桑原武夫集

1

岩波書店刊行

桑原武夫集 1

第一回配本(全十巻)

一九八〇年四月一八日 発行

定価 四〇〇〇円

著者 桑原武夫

発行者 緑川亨

発行所 千101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五
株式会社 岩波書店

電話 〇三(三六)五四二一
振替 東京六(三三)四〇

印刷・三陽社 製本・青木製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 桑原武夫 1980

凡 例

一、この集は、桑原武夫の作品の中から、代表的ないし主要的と思われるものを、著者が自選し、これを年代順に配列し、十巻にまとめたものである。

一、配列は、ジャンルの如何を問わず、すべて発表年代順によつた。ただし、編集の都合上、厳密に順序に従えなかつた場合も稀れにある。

一、初出の場所と年月は各作品の末尾にしるした。

一、挿入写真のうち、桑原撮影のものには*印を付した。

一、テキストは原則として最近のものを用いた。また、今回若干の訂正を加えたものもある。以後これを定本とする。

一、反訳、対談、座談は取めないが、調べのつく限り、全著作目録には記載した。

一、第十巻には、全著作目録、年譜、索引を入れる。

目次

凡例

一九〇	尾上郷川と中ノ川	2
一九三	スタンダールの芸術について	26
	積雪期の白根三山	47
一九三	スタンダール	54
一九四	虚子の散文	80
	服装と行為	84
	山岳紀行文について	89
一九五	あの頃のこと	98
	小説の読者	102

	富岡鉄斎展を見て	110
一九六	能郷白山と温見	120
	湖南先生	128
一九七	『遠野物語』から	140
	パリの公園	151
	ファーブル博物館	159
一九八	ブルターニュ紀行	168
一九九	パリ大学開講式	196
	文学的フランス	202
	アラン訪問記	217
	パリの本屋など	229
	早春日記	236
	ドイツ紀行	242

目 次

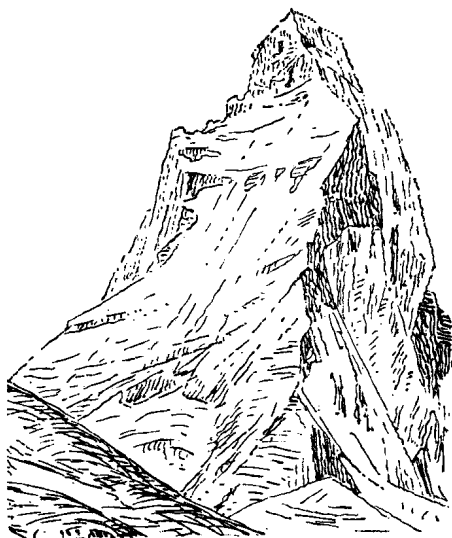
ラシーヌへの道	257
ニームの闘牛	277
美術品の防衛	290
山 遊 び	297
慰戯としての文学	301
『古史弁自序』を読んで	306
鈴鹿紀行	309
キーツの墓	316
フリー先生	320
コンパニョナージュ	332
一五二 アメリカ上陸	342
黒 人 街	348
モンテーニュの城	358

スタンダードル遺跡めぐり	365
政治遊戯	379
芸術家の実生活と作品	399
戦時下の登山	411
鳥の死なんとする	419
一壺三 展 墓	426
詩 人	433
二十年前の三好達治君	440
歴史と小説	447
登山の文化史	455
『クレージュの奥方』について	480
『三国志』のために	519
さくろの花	544

目 次

一五三	書物について	550
	五十マルク札	557
	外国文学研究への反省	563
一五四	ヴァレリーの『スタンダール論』	570
	現代フランス・ヒューマニズム	584
	町一番の風呂	613
一五五	西田先生の一面	618
	白 跋	623
	挿絵目録	651

1930



マッターホーン(A. ゴス筆)

尾上郷川と中ノ川

陸測五万分の一の「白山」をひらいて見ると、尾上郷川は別山から庄川まで、東西にほとんど地図一枚を貫いて流れている。このあたりには大きな谷である。その上、ちよつとした悪場もありそうに見える。上流はのびのびとした河原らしい、そこには美しい瀾葉樹が鬱蒼として茂っているだろう、岩魚もきつと多いにちがいない……それに第一、今まで人間の全く通らなかつた所へ行くというだけでも、すでに興味がある。

こういうふうに一年も前からいつも話し合つて、もう自分たちのものになつたような氣持さえする尾上郷の谷へ、いよいよ入ることに決まると、白山からの下りも普通の道ではつまらない、中ノ川（白山大汝峰から北流する谷）を下つて見ようということになつた。そして田中氏をリーダーとするわれわれ五人は、折りからの好天氣と長次郎らのすぐれた支持によつて、この谷々に十日間の楽しい山旅をもつことができた。

一行 田中喜左衛門、山本慶次郎、葉谷忠三郎、多田政忠、桑原武夫。

人夫 宇治長次郎、先祖栄治、山本重松。

地図 陸測五万分ノ一、白鳥、白山、白川村、白峰。

中野まで —— 昭和四年八月二・三・四日 ——

京都を早朝にたち、越美南線よかみなんせん深戸ふかど着午後三時、すぐ駅前待っている乗合自動車にのる。それから高鷲たかすへ五時半に着くまで自動車に乗りづめだから、随分つらかった。ことに白鳥しろとで乗換えてからは、三人乗りの古フォードに荷物たくさんのわれわれのほかにもう一人、六人詰込まれたのだから、汽車中のように靴、草鞋優劣論を闘わす余裕などとてもない。十里の悪路を歩む以上に疲れてしまった。終点の高鷲村たかすむら大鷲正おほすけケ洞ほらで高正館たかむねというのに泊る。

翌朝、外で手水を使っていたらアブに刺された。ちよつと山らしい気持になる。テントその他の荷物は早朝手車で運ばせたから、われわれは一日がかりでゆつくりと中野まで行けばよい。七時半すぎ、正ケ洞をたつ。

蛭むしケ野は地図通りのじめじめした荒野である。それを貫いて改修したばかりの、いやに幅の広い赤土の道がある。曠野を行くなどという気はさらさない。この北端に地図にもっている、雪中避難小屋がある。三間に二間くらい頑丈な造りで、米、薪、食器などの用意がある。その前の踏石に腰を下ろして一服やっている、新開地の部落へ通ずる路のかけから二人の子供が現われた。全くのぼろを着て、蛙でも釣るのであろう、糸の端に綿をつけた釣竿をもっている。好奇の目を輝か

せてわれわれを見まもっているが、ちょっとも近寄らない。お菓子をやろうといつても、何を話しかけても、はにかんで答えないのである。やがて立上がつたわれわれが六、七間も歩いて振りかえると、われわれが残したバットの箱とチョコレートの包紙をそつと捨てている。あの緑の小箱と赤と紫の色紙が、蛙釣りに代つて暫くこの子供たちの心を占めるのだろう。

いつも世話になる炭焼きの子供のために人形をリュックサックの中へ入れて鈴鹿の山へ行つた友人のこともふと思ひ出されて、いささか感傷的なものを感じながら国境を越えて行く。野野侯へ下る谷にはトチの木がたくさんあり、微風をうけてその裏葉が白く光るのが却つて汗を覚えしめた。

牧戸で昼食と午睡に二時間半を費して、五時半、中野の林屋旅館に入る。洗足と一緒に冷いカルピスが出されたのは嬉しかった。

すでに先着しているはずの長次郎らの姿が見えない。この行は地元で良い人夫がえられないことを予想したし、また初めてのコースであるから、谷になれた越中大山村の宇治長次郎らを伴うことにし、彼らは城端から入つて、ここで落合うことになつていたのである。夜になつても来ない。くわしい手紙に為替と地図まで添えておいたのに。

翌の日はよく晴れた空を眺めながら一日滞在しなければならなかつた。昼も過ぎたので宿のものに人夫を交渉してみた。村の肴屋が岩魚を釣りに尾上郷村の上まで行く以外には、誰も谷を遡つたものはない。一度、青年団で企てたことはあるが、進んで先達になるものがなくて取止めになつた。

しかし荷を担うだけの人夫ならあるだろうという返答なので、それを頼もうとしているところへ、息を切らして先祖栄治きんぢが駆けてきた。手紙はもらつたが、とつくり読まず、地図と為替だけもつて飛出して城端まできた。飛驒から白山なら平瀬から登るのだろうと人がいうから、平瀬で待つていたが来ないから、もしやと思つて一人だけでここまで見に来たという。その呑気さ加減に小言をいうどころか、腹を抱えてしまった。打合せをすまずと、彼はすぐまた平瀬ヘトットと駆けて戻つていった。

尾上郷川溯行——八月五・六・七・八日——

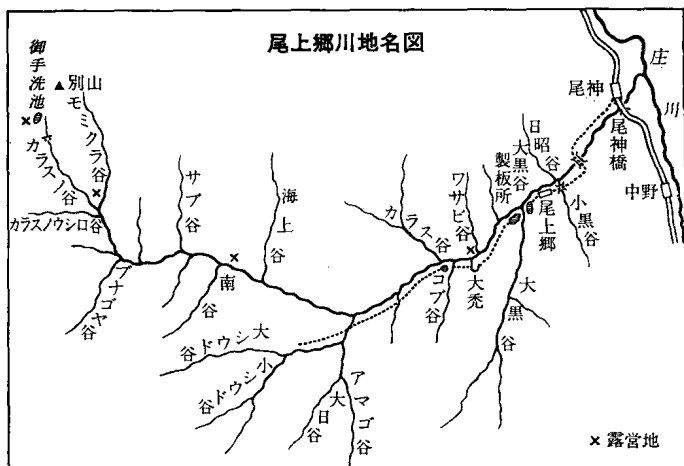
翌五日早朝、長次郎、栄治、重松がくるのを待つて、米一斗二升、味噌一貫、草鞋十足を買い調べた上、九時半すぎ林屋を後にした。海上村かみうらから尾根越しに尾上郷村に至る路はあるが（地図に記載あるもの）、われわれはできるだけ谷筋やぢまを行く考えだつたから街道を進み、尾神村おがみの前の尾神橋の袂から、尾上郷川の河原に下りた。流れはきわめて緩やかで河原の石はみな白く円みをおび、水に浸っている部分はぬるついている。靴の者は草鞋に穿きかえた。はるばる求めて来た目的の谷は、いま眼前にある。それは長さ約六里、水量も従つて少ない、いわば小さな谷にすぎない。しかしあの岩角を曲ると、そのさきはどうなっているか、一枚の地図のほかにわれわれの自由な想像を規定するものは何一つない。そういう新鮮な好奇の心は、新しい草鞋をはじめて尾上郷の流れに浸した

とき強く感じられた。

兩岸の山がまだ低いので、あたりは穏やかな風景である。静流を四度徒渉して一時間ばかり行くと、兩岸に崖多く相迫って、やや谷らしい相貌を呈してきた——そう思いながらふと空を仰ぐと、頭上に大きな吊橋があるではないか。再び見上げると自転車が走っている。われわれはまさに啞然としてしまった。尾神の村から尾上郷村あるいはその上流へかよう道に違いないが、いつ出来たものであろう。尾上郷村へ立寄るために、またこの意外な道を調べるために、昼食後われわれは右岸の藪を潜って橋の袂へよじ登った。橋も道も立派なもので荷馬車の轍が深くついている。これに沿って小黒谷の橋を渡って暫く行くと、山の裾がかなり広い平になっており、稗畑の美しい緑の彼方に尾上郷部落の屋根が見える。家は一軒、なごやかな村である。

山本七郎右衛門方でゆっくり休憩して谷の名称を教わったりする。家は石をのせた板葺だが頑丈な造りで、切妻平入二階建、十二間に七間という山間にしては大きな家屋である。四隅には雲形の軒飾りがついている。母家の一部が厩になって、子馬が母に戯れていた。ここでは食料の関係上、分家する時は麓の村へ下らしめて戸数の増加を許さない掟がある。今この家には四代の家族が住んでいる。「ためらっておいでなされ」と送り出されたのはもう三時前であった。

三十分で大黒谷出合にくる。ここに大きな製板工場がある。尾上郷で聞いたところによると、この工場は昭和二年着業、大黒谷を伐採し（谷にトロッコが見えた）、下駄や機械機械の材料品をかな



り大仕掛にこしらえている由。さきの橋や道は、それを荷馬車で尾神へ出すために出来たものである。

道はここから急に細くなるが、高いところをやらんで大シウド谷の辺まで行っているらしい。われわれは間もなく、これを離れて岩魚釣りの路らしいものを取って谷へ入った。この小径は右岸の藪の中を行き、やがて細い丸木橋によって左岸に渡り、あとは判然としない。徒渉を二回すると、ワサビ谷のやや上流、大禿おおぼ(地図に記載あり)の対岸にかなり広い砂浜がある。四時すぎだったが、ここへ第一夜のテントを張る。汗ばんだシャツを脱ぎすて、藍青によんだ流れへ岩頭から身を投じた時の爽快味は忘れられない。大禿の中腹の道を数人の男が通りかかり、われわれの焚火を見てしきりに呼ばわっていた。砂の床の眠りは快

かった。

翌朝は九時出発、すぐにコブ谷出合、十人余りを容れる小屋がある。城端からきたという樵夫が二人泊って、大禿付近の木を伐っていた。

このあたり流れを挟んで緑の茂み、その静けさは鈴鹿などの谷を思わしめた。ようやく谷は狭まり、徒渉が繁くなった（大禿より大シウド出合まで十四回）。しかし流れが緩いので太腿を没するくらいのもほとんど困難は覚ええない。九年前に麩鉾になったという尾神鉾山への路は見つからなかった。もちろん地図にのっている橋の如きものはあとかたもない。大シウドの少し上で昼食、海上谷出合は二時すぎであった。

地図面では、大シウド谷からサブ谷まで、谷は広い河原のように思われる。そしてわれわれも実はその緑にふちどられた白い河原——私らは勝手にそう想像していたのだが——のピッケルを引きずってのブロムナード、そしてその木陰でのどかな午睡にかなり期待していたのだが、実地はその反対に、大シウドの辺から谷はいよいよ狭く、海上谷から上はいわば断崖の連続であった。たとえば海上谷から二十分ほど行くと兩岸の壁が二三間に迫って、小規模の廊下をなしたところがある。まず左岸をへつって浅瀬に立ったが、前面は急湍をなしている。登られそうなのは左岸の大きな岩のみだが、その下は水が深い。長次郎らは暫く考えていたが、どこからか一本の細い流木